文学的解釈のすすめ

半藤　英明（日本語学）

『宇治拾遺物語』巻第三ノ六（絵仏師良秀の話）に次の一文（以下「例文」とする）がある。

わたうたちこそ、させる能もおはせねば、物をも惜しみ給へ

この「給へ」を、「こそ」の結びとしての已然形ではなく、命令形と捉える解釈がある。[1]「汝らは、たいした才能もお持ちでないのだから、物を惜しみ給え」というような訳になるのだろうか。ここでは、この問題について語学的見地から私見を述べる。

その解釈では、「こそ」の結びを「おはせねば」の「ね」としているが、まず、その可能性について。「こそ」の係結びが已然形条件句の用法（つまり「～こそ…已然形、主文」の形式）を起源とし、そこから主文が省略されることで成立したことは周知のことである。[2]「こそ」による条件句は、逆接の例が殆どであるが、次のような順接の例（しかも、結びの流れたもの）もある。

①「そこにこそ、すこしものの心得てものしたまふめるを、いとよし。（後略）」　（源氏、若菜上）

②「まろをおぼさば、此（の）腹の公達を男も女もおもほせ」とこそ申（し）給へば、いみじきさいはひおはしける。（以下略）」　（落窪、巻之四）

①は、光源氏が明石の君に対し「あなたはいくらか物の道理がおわかりのようなので、ほんとに結構だ」と述べるところである。②は、少将の言葉で、落窪姫が「私のことをご心配くださるなら、～」とおっしゃるので、（四の君にも）たいへんな幸福が得られなさるのだ、と述べているところである。「こそ」を含む条件句は、原則として「こそ」の文節のかかり先が条件句内にあり、後の主文にはかからない。①の場合、「そこにこそ」が直接「いとよし」にかかっているとは考えられない。②では「とこそ」は「申（し）給へば」にはかかるが、後文の文節にはかからない。

そこで、先の例文が①②の類例に当たるか否かであるが、例文の「わたうたちこそ」は意味的に「おはせねば」とも「惜しみ給へ」とも関係する。その点で、例文は「こそ」による順接条件句①②の類例とは見なし難い。即ち、

例文の「こそ」の結びを「おはせねば」の「ね」に限定して把握することは適当でない。係助詞と結びの呼応関係は、係助詞の文節の意味的なかかり先をはるかに越え、意味的に関係しない文末にまで及ぶこともある。[3] これは、それらの呼応関係があくまで文末を目指すものであることを示している。その点からは、従来の諸文献の解釈がそうであったように、例文の文末が「こそ」を承けての已然形であるとする可能性は極めて高いと言える。

但し、上記のことは、「給へ」を命令形と解釈することの妨げにはならない。ここで、例文を「こそ」の係結び構文と見る先入観を取り払い、例文の「こそ」を呼び掛け用法と考えてみる。「こそ」の呼び掛け用法とは、次のようなものである。

③「大将こそ、宮抱きたてまつりて、あなたへ率ておはせ」　（源氏、横笛）

④「少納言の君こそ。明けやしぬらむ。いでて見給へ」　（堤中納言、花櫻をる少将）

どちらも「大将よ」「少納言の君よ」と呼び掛けたあと、呼び掛け対象者に向かって命令文を発する表現形式にある。例文を、これらの類例と捉え、「わたうたちよ」と呼び掛けたものとすれば、文末の「給へ」を命令形と捉える解釈を支えるものとなる。

しかし、これは、例文を「こそ」の係結び構文と見る従来の解釈に変更を迫るほどの決定的なものではない。例文の一文前には「今見れば、かうこそ燃えけれと、心得つるなり。これこそせうとくよ。」とあり、また例文は「といひて、あざ笑ひてこそ立てりけれ。」と続く。つまり、例文の前後には「こそ」が連続的に使用されており、その件（くだり）は物語のクライマックスとして文章的に強調されているところである。そのような並びから見れば、「わたうたち」が「させる能もおはせねば、物をも惜しみ給ふ」という事態を発話者の主観をこめて強調して表現したものが例文である、と見ることも直ちに否定し難い。その場合は「汝らは、たいした才能もお持ちでないからこそ、物を惜しみなさるのだよ」というような訳だろうか。概して「こそ」の係結び構文は、文末に助動詞、感情形容詞、感覚動詞を取り易くするが、[4]「おはす」「おはします」など、尊敬表現を取ることも珍しいことではない。

そこで結論だが、問題の例文について文法的に規定することは難しく、それこそ文学的解釈が十分に発揮されるべき表現であるということになるであろう。古典教育の現場にあっては、さまざまな解釈の可能性について議論されることを期待したい。とりわけ「物をも惜しみ給へ」の「も」に注目し、「物を惜しむ」以外に何を暗示している

のか、とことん拘ってみることをお奨めしたい。

たとえ文法的に特定できなくても、わたしたちには想像力がある。

注

1　佐野比呂己「文脈と係り結び」（『解釈』第52巻第11・12号、平成18・12）

2　例えば、山口佳紀は「已然形は、本来的には、単なる確定条件を示すものであって、従って、原理的には、順・逆いずれにもなり得るものである。しかし、現実的には、言語的標識の特に存しない場合には、順接となり、上句にコソ・シモなど強調辞が投入された場合には、逆接になるとまとめることができよう」と述べる。『古代日本語文法の成立の研究』（有精堂出版、昭和60・1）451頁

3　小田勝「係助詞に対する過剰な結びについて」（『國学院雑誌』第99巻第1号、平成10・1）に指摘がある。

4　半藤英明『係結びと係助詞　「こそ」構文の歴史と用法』・第3章（大学教育出版、平成15年・9）

〔引例〕『源氏物語』『宇治拾遺物語』は日本古典文学全集（小学館）、『落窪物語』『堤中納言物語』は日本古典文学大系（岩波書店）に拠った。